

シネクドキリンクとメトニミーリンク — 字義性と含意の認知語用論的再考 —

東京工科大学 片柳研究所
岡本 雅史

概要

- 背景
- 研究の狙い
- 関連性理論の推論モデルと問題点
- 発話理解を支える言語コミュニケーション評価 (LCA)
- メトニミーとシネクドキ
- 対象指示のシネクドキリンクとメトニミーリンク
- 対象指示における含意と字義性
- 一語発話のシネクドキリンクとメトニミーリンク
- 因果関係としてのメトニミーリンク
- まとめ
- 今後の課題

背景

🌐 子供は言語をメトニミー的にもメタファー的にも用いる。

❖ 例1：（父親がよく食べているチョコレートやよく用いているパソコンなどの写真を指して）「パパ」

→ ただし、それらの名称を覚えた後ではそのような表現を用いない。

❖ 例2：（折れている菊の花を見かけた子供が）「ほら、お花がお辞儀してる」（山梨 1997: 208)

→ 「お辞儀する」の拡張と捉えるか、「花」の擬人化と捉えるか？

🌐 日本人は自分の鼻を指して「私」を意味する（→外国人に理解不能）

❖ メトニミー的認知に文化差が存在

❖ 指示表現の曖昧性

🌐 写真のタグ付けが困難であることはよく知られている。



背景

🌐 子供は言語をメトニミー的にもメタファー的にも用いる。

- ❖ 例1：（父親がよく食べているチョコレートやよく用いているパソコンなどの写真を指して）「パパ」
 - ➔ ただし、それらの名称を覚えた後ではそのような表現を用いない。
- ❖ 例2：（折れている菊の花を見かけた子供が）「ほら、お花がお辞儀してる」（山梨 1997: 208）
 - ➔ 「お辞儀する」の拡張と捉えるか、「花」の擬人化と捉えるか？

🌐 日本人は自分の鼻を指して「私」を意味する（→外国人に理解不能）

- ❖ メトニミー的認知に文化差が存在
- ❖ 指示表現の曖昧性

🌐 写真のタグ付けが困難であることはよく知られている。

- ❖ 何を意味する？→「富士山」or「山」or「ツツジ」or「風景」or「写真」or「青」
- ❖ この写真を見て「綺麗だね」と発話した時、その都度何を指しているのかを特定する必要はあるか？

研究の狙い

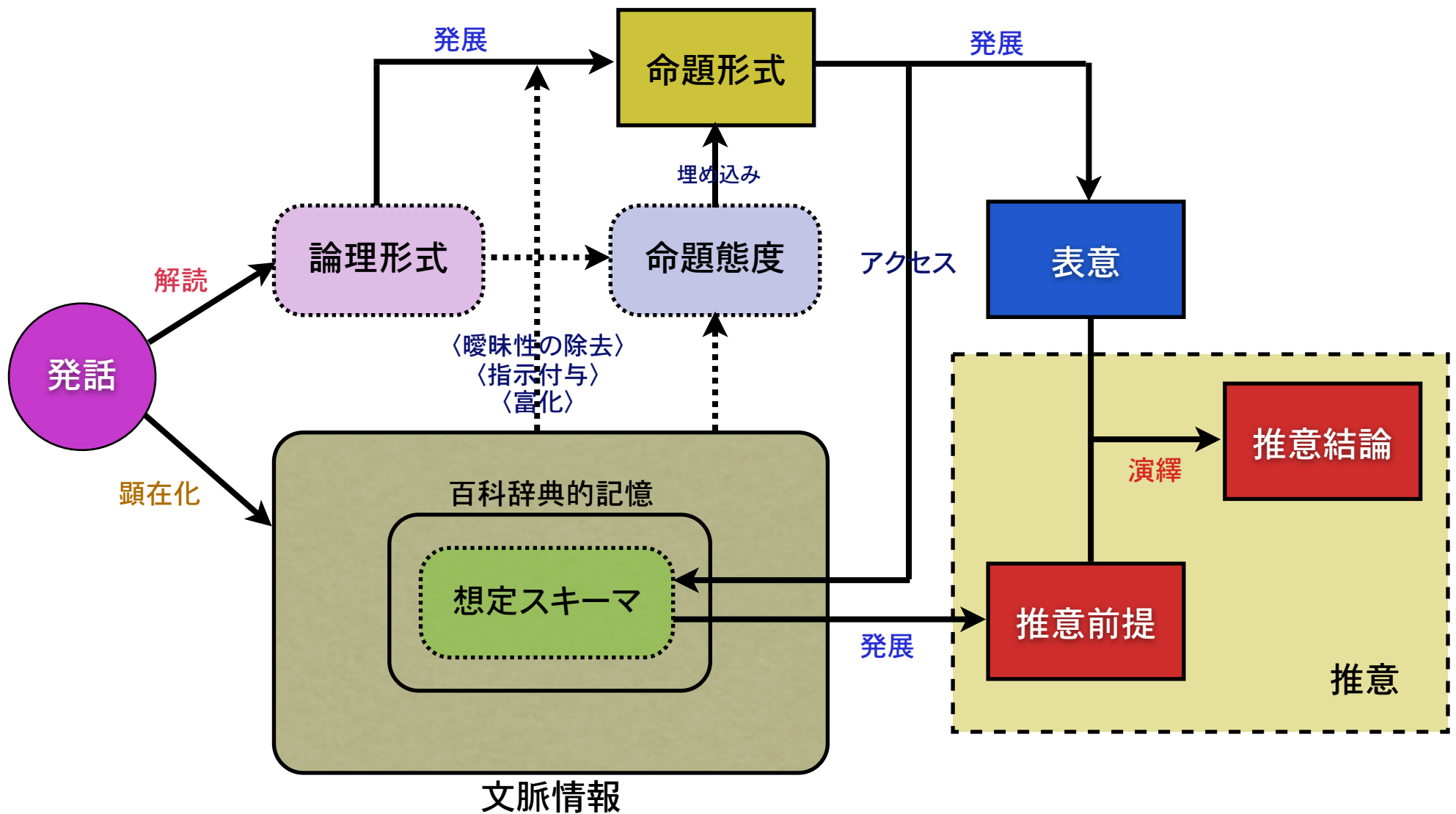
- こうした言語使用や認知における経験的事実を踏まえて、発話の字義性や含意などの語用論的現象を明らかにする上で、認知言語学のフレームワークが有効ではないか？

→ 関連性理論とは異なる〈認知語用論〉の可能性

● 問題提起

- ❖ 話し手が意図的に含意することと非意図的に意味することは何によってもたらされるか？
 - ❖ Langackerのbase/profileとスコープは発話レベルに拡張可能か？
 - ❖ 発話の字義性と含意や推論の関係は何か？
 - ❖ 聞き手はどのようにして話者の「言いたかったこと」を見出すのか？
- こうした問題に取り組むために、語・句・文などの多重レベルに渡るメトニミーリンクとシネクドキリンクによる分析と説明を試みる。

関連性理論の推論モデル



関連性理論の問題点

🎯 発話理解に〈表意〉や〈推意〉の形成は不可欠か？

- ❖ 発話理解の目標(goal)と副産物(by-product)の混同
- ❖ 推論による発話理解の説明でしばしば陥りがちなこと

🎯 命題操作的な傾向（→局所的な処理を全て命題レベルに還元する）

❖ Sadock (1986)の批判

- ◆ 1) 関連性理論の理論は語用論の原則を単純化しすぎており、それだけでは過不足のない説明原理とは言えない。
- ◆ 2) ポライトネスのように命題的に扱われやすいが、実際は水平的な社会的能力の反映であり、推論能力とは区別されるべき現象が存在する。そうした現象を命題化してしまうと、高度にモジュール化された理論であれば回避できるはずの単一システムの人為的な複雑化が生じてしまう。

🎯 どこまでを話し手の意図の中に含めるべきか？

- ❖ ある発話が聞き手に与える効果は話し手の意図を超えたものがある。
- ❖ 話し手が利用するリソースとしての文脈情報（推意前提）は必ずしも聞き手に伝えたい情報ではない。

発話者と解釈者の相互作用としての発話理解

🎧 発話理解は、発話者による〈事態認知〉と解釈者による〈発話事態認知〉の相互作用を通じて協同的に達成されるもの (岡本 2003, 2006)

❖ 発話者の事態認知

- ◆ 言語慣習と発話者の主観性の相互作用

❖ 解釈者の発話事態認知

- ◆ 発話事態 (speech event)

- ・ 発話者が自らの事態認知のありようを言語化することを通じて、何らかの意味を〈いま・ここ〉において解釈者に伝えていること

- ◆ 解釈者の当該発話事態認知は言語コミュニケーションを3つの次元から評価 (assess) することを通じて行われると考えられる

発話者は何らかの事態を認知し（＝認知主体）、聞き手に何らかの情報を伝えるべく言語化し（＝情報伝達主体）、その言語化した発話を通じて何らかの行為を遂行し、聞き手に影響を与える（＝行為主体）

聞き手の発話理解を支えるLCA

- ICMに基づく言語コミュニケーション評価 (linguistic communicative assessment; LCA) (岡本 2006, Okamoto 2007)
 - ❖ 事態認知評価 (constural assessment) のICM
 - ◆ 発話者の事態認知は解釈者の事態認知と一致していなければならない
 - ❖ 情報共有評価 (grounding assessment) のICM
 - ◆ a) 発話が伝達する情報は聞き手にとって十分な情報性を有していなければならない
 - ◆ b) aの達成は必ず話し手と聞き手の双方が既に共有している情報にアクセスすることで達成されなければならない
 - ❖ 発話行為評価 (speech-act assessment) のICM
 - ◆ 発話を構成する言語表現が要請する発話行為タイプと、発話状況が要請ないしは承認する発話行為タイプは一致していなければならない
- ➡こうした規範に照らすことで解釈者は当該発話の逸脱性を認知し、それを発話理解のリソースとする。

LCAに基づく推論可能性の判定

🌐 Grice (1989) の'generalised implicature' (一般化された含意)

❖ X is meeting a woman this evening.

→この女性がXの妻でも母親でも姉妹でも親しい友人でもないことを含意

➔ つまり、発話者はそうした特定の女性であれば別の表現を用いるであろうことが解釈者によって期待されている。(→LCA)

🌐 対象指示

❖ 「彼は何をしていたの？」 / 「彼は何を聴いていたの？」

(1) 彼は音楽を聴いていた。

(2) 彼はビートルズを聴いていた。

(3) 彼はビートルズの曲を聴いていた。

(4) 彼は"Yesterday"を聴いていた。

➔ 同一事態に対する言及であっても、どのような先行質問に対する返答であったかや聞き手と話し手がどの程度情報を共有しているかなど、コンテキストと聞き手の事態認知を勘案せずしてどの発話がどの程度聞き手の推論を必要とするかは決定不能。(→LCA)

メトニミーとシネクドキ

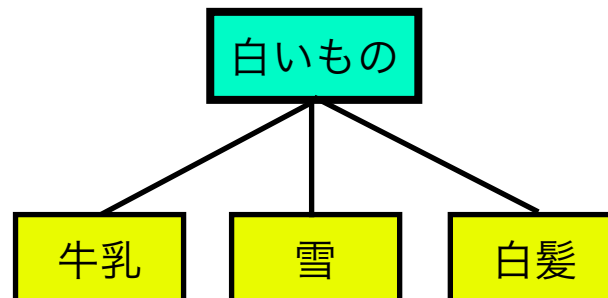
● メトニミー（換喩）

- ❖ トポニミー：〔空間／場所の隣接性に基づく表現〕
- ❖ パートニミー：〔部分／全体の隣接性に基づく表現〕（山梨 1992: 93）
 - ➔ しかしながら、実際にはトポニミーとパートニミーの違いは何をもって全体とするかという認知のスコープの取り方によって規定されていると思われるので、ここではあえて区別しない。

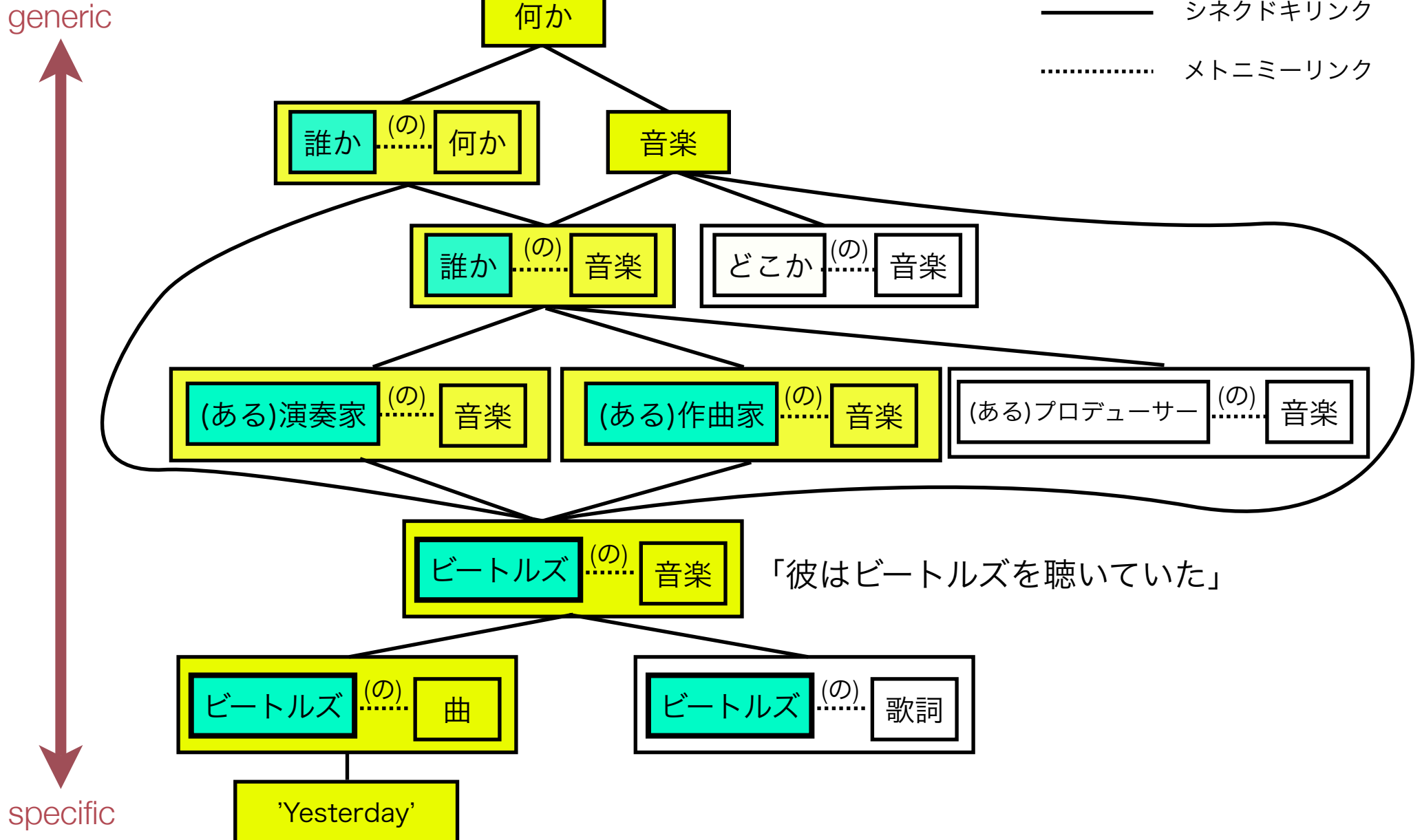


● シネクドキ（提喩）

- ❖ 一般的にはパートニミー的に捉えられることも多いが、ここでは佐藤 (1978) に従って〈類と種〉の関係に基づく代置と捉える。



対象指示のシネクドキリンクとメトニミーリンク



対象指示における含意と字義性

🎧 字義性と曖昧性

❖ 「彼はビートルズを聴いていた」

◆ シネクドキリンクに基づく2種類の曖昧性

- ・ (a) 上位カテゴリーの曖昧性：ビートルズは「演奏家」か「作曲家」か？
- ・ (b) 下位カテゴリーの曖昧性：ビートルズの何の曲を聴いていたのか？

◆ 曖昧性解消が問題となるのは、解釈者が当該発話に対するLCAによって逸脱的と捉えた場合に限られる。

- ・ 例：「彼は何を聴いていたの？」 「ビートルズを聴いていたよ」
 - ・ 発話の潜在的な含意
 - ・ 〈何の曲かは知らない〉
 - ・ 〈曲についてまで言う必要はない〉
 - ・ etc.

➡これらの想定を話者が意図していたかどうかはLCAによってのみ判定可能

一語発話のメトニミーリンクとシネクドキリンク(1)

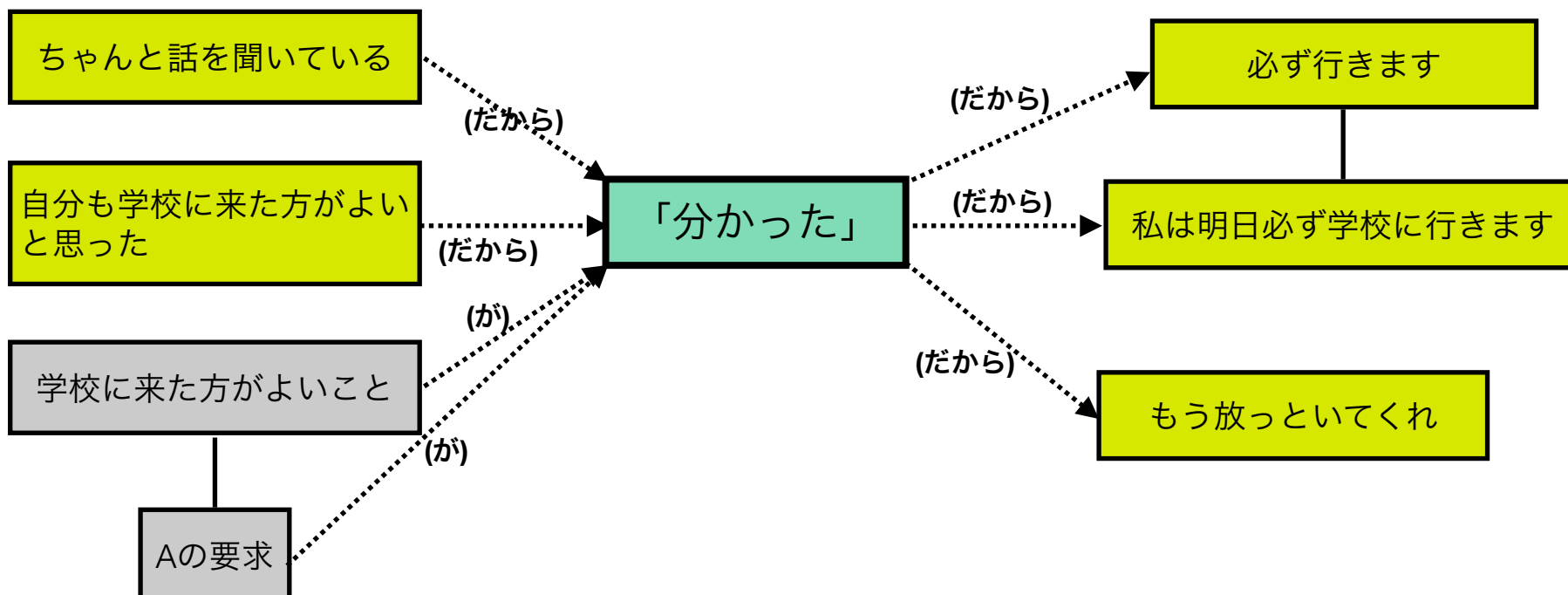
一語発話による返答

❖ A 「明日はちゃんと学校に来るんだよ」

B 「分かった」

◆ 対話者のツッコミ：φ > 「何が？」 / 「それで？」 > 「なぜ？」 / 「誰に？」

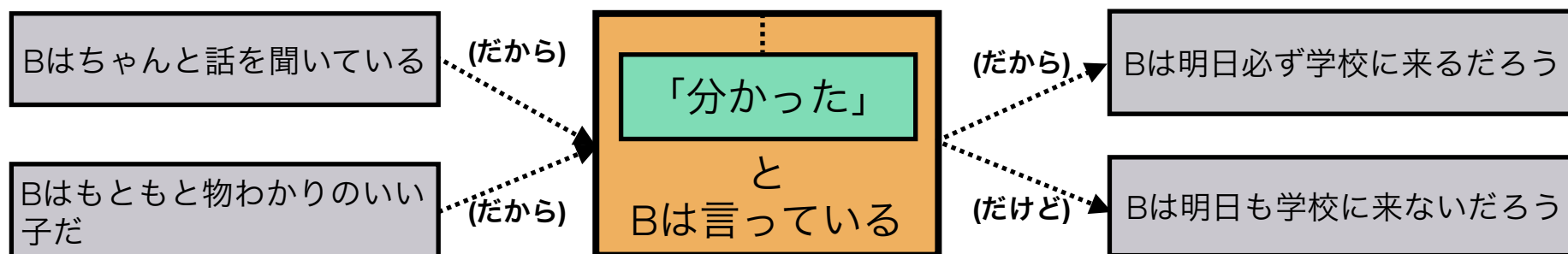
➡ 対話者はBの発話をメトニミー的に捉えており、発話が不足している情報要求を行うか、情報要求を行わない場合は含意として明示されていない要素を推論することができる（→ただし、話者の意図的なものとは限らない）。



一語発話のメトニミーリンクとシネクドキリンク(2)

🎧 解釈者の推論と話者の含意

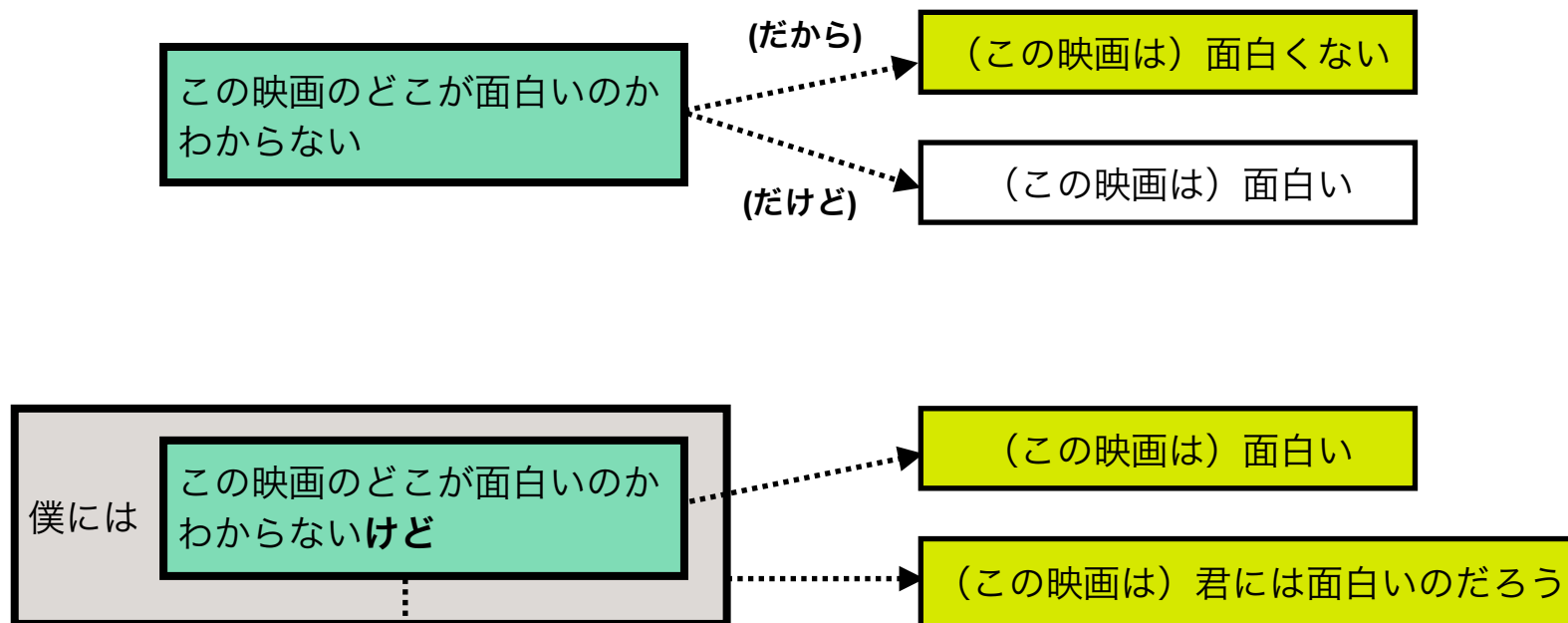
- ❖ しかし、解釈者（対話者/聞き手）の推論は発話内容だけではなく発話事態をトリガーにしても行われうる（＝発話事態の前景化）
 - ❖ こうした推論のアウトプットは話者の意図した含意とは言いがたい
- ➡ ∴ (1) 話者の意図した含意は解釈者の推論によって得られる命題の一部に過ぎない
- * 関連性理論における命題操作の過剰範化
- (2) 解釈者が発話を理解したと言えるために、必ずしも話者の意図を理解することは必須でない。
- * 解釈者の発話事態認知プロセスの重要性



因果関係としてのメトニミーリンク(1)

含意を喚起するメトニミーリンク

- ❖ 通常，発話と含意の関係は順接的な因果関係にある。従って，メトニミーリンクによって逆接で接続される含意は存在せず，その場合は「けど」「が」などが必ず発話中で明示されると考えられる。
- ❖ 例：「どこが面白いのかわからない」の多義性



因果関係としてのメトニミーリンク(2)

🎧 「すみません」 「申し訳ない/申し訳ありません」

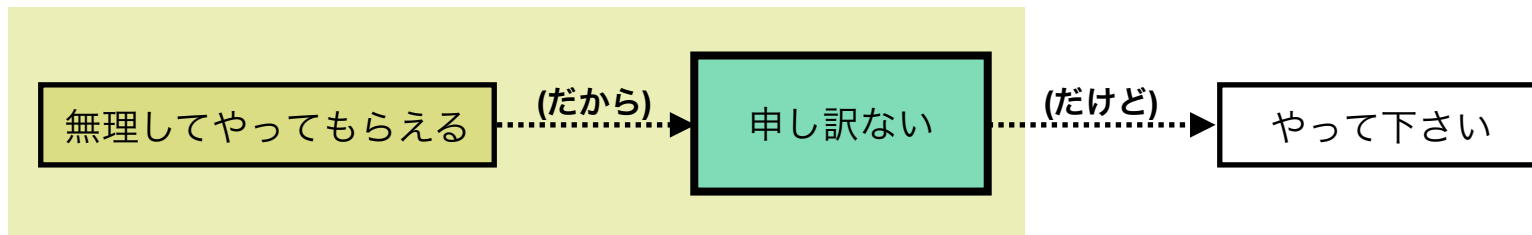
- ❖ 謝罪発話が一見して逆接的な含意を用いるように見える例がある。

例：A 「これ明日までにやっておいて下さい」

B 「えっ、今日はかなり忙しいんだけど」

A 「申し訳ない」 〈→ (けど) やって下さい〉 ?

- ◆ この例では実際は直前のBの発話が「けど」を明示化しているため、その含意が「仕方ないからやります」というものであるのを受けて、「(無理してやってもらえるから) 申し訳ない」という含意だと解するのが適切である。つまり、Bの発話行為が〈拒否〉ではなく〈受諾〉であるとAが理解しているからこそ「申し訳ない」という発話が可能となる。



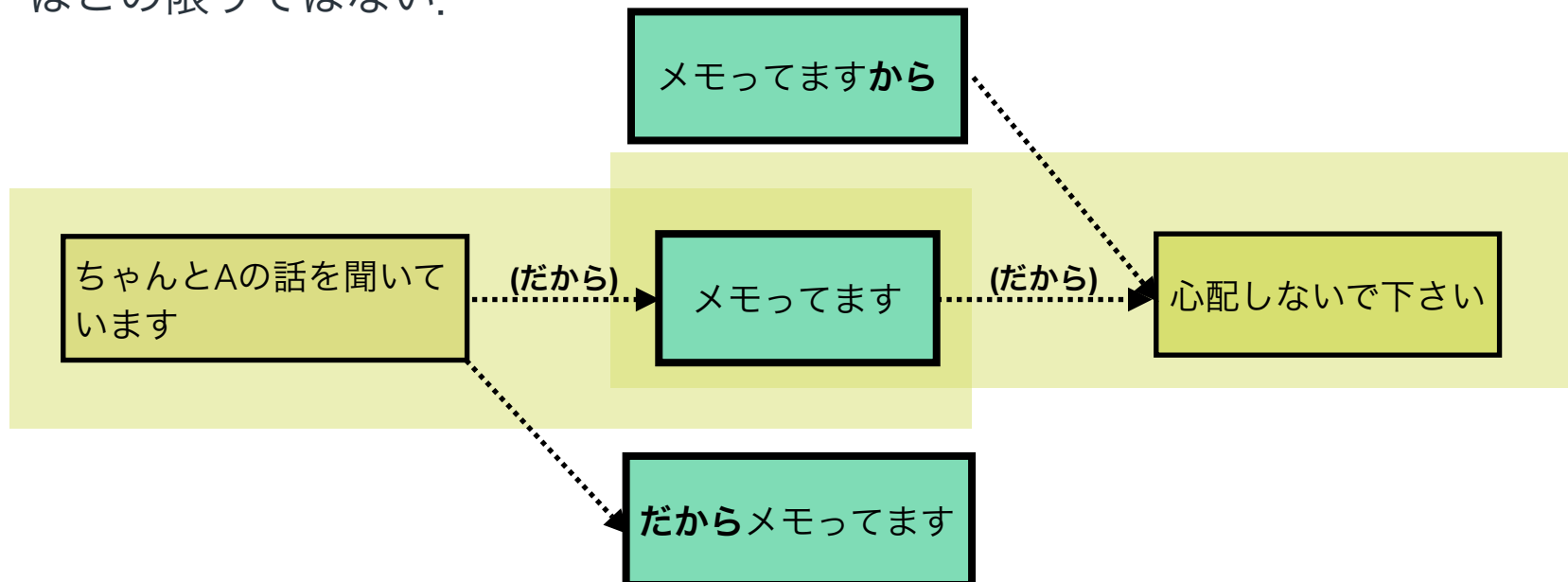
因果関係としてのメトニミーリンク(3)

前件としての含意／後件としての含意

例：A「人の話ちゃんと聞いている？」

B「メモってます」

- ❖ Bの発話には前件としての含意と後件としての含意の2つが考えられる（下図参照）
 - ◆ これを明確化するために「だからメモってます」「メモってますから」という形で因果関係を明示化することが可能。
 - ➔ これはYes/No疑問文であるから可能であり、「いつ食べた？」と聞かれた場合はこの限りではない。



今後の課題(1)

🌐 LCAによる推論の動機付けと制約

❖ そもそも発話者はなぜ含意表現を用いるのか？

- ◆ (1) 交換可能条件（非意図的）：本来ならばpと言ってもいいところを、たまたまqと言う場合
- ◆ (2) 交換可能条件（意図的）：本来ならばpと言ってもいいところを、あえてqと言う場合
→ qと言うことでpと言うよりも発話者の意図を明確化できる
- ◆ (3) 交換不可能条件：そもそもqとしか言えない場合
→ 話者がpと表現することを想定していない
- ◆ (4) 交換困難条件：pと言ってしまうと聞き手に誤解を招く場合

🌐 メタファーリンクの必要性の考察 (Cf. グループ μ)

❖ 二重のシネクドキリンクで全て説明可能か？

🌐 発話と含意の図地関係

❖ 発話と意図的な含意はどちらがprofileでどちらがbase？

➡ 発話事態レベルと意味レベル、ないしは認知とコミュニケーションで図地関係が逆転する可能性

今後の課題(2)

🌐 メトニミー解釈とメタファー解釈の相克

❖ The city was asleep. (レカナティ: 66)

- ◆ ‘the city’がメトニミー的解釈を受けて「その都市の住民」と解釈可能であるし、また‘asleep’が「静かでほとんど活動していない」というメタファー的解釈を受けることも可能。
- ◆ しかしどちらかに字義的な意味を与えると他方は字義的な解釈を許さなくなる。

🌐 文末表現の違いによる前件含意と後件含意の生起可能性

❖ 終助詞と接続助詞の終助詞化の違い

❖ モダリティによる、メトニミーリンクのスコープの違い

🌐 形容詞の装定用法による名詞句と叙述用法による述定の認知プロセス

🌐 名詞と文におけるspecific/generic, definite/indefinite

ご清聴ありがとうございました。